

爆弾迷路

大島 行雲

残り九分四十五秒。フラントツは慎重に念入りに配線を見つめる。赤い線と青い線のどちらかを切ればいい筈だ。真上で赤く点滅するデジタル表示の数字は、残り六分三十一秒、三十一秒、三十秒。まだ時間はあるが、それほど余裕だとも言い切れない。目の前の小さな機械の構造を隅から隅まで隈なく観察し、頭の中で配線図を再構築し、あらゆる可能性を検討し、推測し、それを疑い、再検証し、決断する。

赤だ。いや、青かもしれない。残り三分一秒。赤だ。ラジオベッチに力を入れると、点滅は止まった。残り一分三十五秒。どこかのスパイ映画みたいに残り数秒なんて解除の仕方はまともじゃない。残り一分でも相当に危険だ。点滅が止まると同時に自動的に開錠して扉が外側に開いた。

また、延々と灰色の壁が左右に続いている。空は見え、壁と同じ色の天井が合間に蛍光灯で照らされながら覆い被さるだけ。フラントツは前へと踏み出した。もしかしたら進んでいる方向は前ではなくて後ろか行き止まりなのかかもしれないが、考える暇はない。それでも考えてしまったところで、一度開いた扉はフラントツが通り抜けた途端に閉まって、外側からはつんともすんともいわず全く開けられやしないのだ。

だから、進むしかない。一本道を選択の余地なく歩いていくと突き当たって左右に分かれた。右を選んで歩き続けて暫くすると、また、扉が見えてきた。中央には見慣れたというよりも見飽きたデジタル表示の数字と配線。表示された数字は、残り三十七分。あそこで左に曲がれば出口だったかもしれないし、残り七秒だったかもしれない。今となつては分からないし、戻るのにもリスクがある。そろそろ仮眠したかった。偶に残り二十四時間以上ある時があつて、寝られるのだ。何故か新興宗教に入れ込んだ中学の同級生の夢を見たり、今やAV出演や覚醒剤所持での逮捕ばかり話題にされる元アイドル・グループの夢を見たりする。

扉の前にしゃがんだ。また、緊張と忍耐が始まる。これは爆弾じゃないかもしれない。でも、爆弾かもしれない。